みんなの文芸

引間豊作選　投稿数23句

仙人掌の賞められ過ぎる夜の部屋　下日野沢　高山　ユウ

(評)　豪華そうに見えながらその終末、花のうちでは悲哀の女王とも想える。品種により純白から真紅等多様で、大きいものでは直径十五センチ程にも及び、開く時そこに居合せればその音が聴けると言うが、うっかりすると瞬時の油断で見損ねてしまう。作者は運良くそこに立会えて、佳麗なる色香の恩恵に浴す寸時の幸運に酔えたのである。見事なまでの花の演出も夜の明けやらぬ間に消滅して朝を迎えることになる。夏の霧、草引女、青嵐等の句のどれも机の上で組み立てられるものでなく、現地ならではの吟に感銘。

三峯の聖なる森や夏の霧　三沢　新井　民子

沛然と降る空仰ぎ草引女　下田野　中田　久恵

神の住む山を吹き上ぐ青嵐　下田野　根岸　進

医通いのもどかし吾に栗の花　下日野沢　五十嵐静枝

次々と美声もはさみ軒つばめ　金崎　設楽　武子

夏霧やゆったり高原横切れり　皆野　大沼シヅ子

早掘りの馬鈴薯持たせ帰しけり　皆野　新井　茂

礫かれるよと寄せてもらいぬ雨の蟇　三沢　真下　杏子

山寺の池のメダカの童唄　金沢　関和　起一

夏花わけ思い深まる縁かな　下日野沢　小川　もと

足萎の吾にきて鳴くかほととぎす　三沢　長谷河ソノ

可愛いいなその身軽さの子かまきり　三沢　沢野　恒平

中田國太郎選　投稿数12首

沢沿いの闇にあまたの蛍火よわが家の庭に眺むる至福　三沢　真下　杏子

(評)　蛍は、清流に住み、美しい自然環境のバロメーターとして尊重されてきた。そして、蛍ほど多くの人々に親しまれ、愛されてきた昆虫はいないのではなかろうかと思う。初夏の夜の風物詩としての蛍を待ち望んでいる作者の心情が、上の句で一気に詠み込まれ、第三句の「蛍火よ」の「よ」の感動の助詞に集約されている。しかも、その蛍が庭で眺められるとは、羨ましい限りである。斎藤茂吉の歌集「白き山」にこんな歌がある。「蛍火をひとつ見いでて見守りしがいざ帰りなむ老の臥処に」私の好きな一首である。新井作、七夕を通じて宇宙を思うロマンが漂う。

久方の星合の空仰ぎつつ果てなき宇宙に思ひをはせり　三沢　新井　民子

闘病に耐えたる甥の命火をうばいし無情かくも悲しき　皆野　新井　愛子

病みて知る命の輝き尊さと他人の優しさ心にしみる　金崎　山田　雅子

米寿まで今一息の二年半己に厳しく回りに優しく　皆野　金子善次郎

幾度もの友との旅に思ひ馳す知覧特攻の遺品に涙せしこと　三沢　新井　叶子

幾年も軒に作りし燕の巣敵多かりて巣立ち叶わず　下田野　安井　光代

美術館ブロンズ像の乳房には光沢があり幾人触れしか　上日野沢　四方田利男

二十年八月吾は十六で竹槍握り災天下にいた　皆野　新井　茂

旅に来て友の愛せし鈴蘭の香りを黄泉にとどけと思ふ　皆野　笠原三江子

井戸水で新土よく練り挿し木する榊の新芽に笑みの朝明け　皆野　塩田　千代

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。

山田実穂（みほ）さん

中三　山田実穂

古池やかわずとびこむ水の音　松尾芭蕉

水草がはびこって、緑色にごった古池、いま、その中に蛙がとびこんだ、ぽちゃんという小さな音だが、あたりがしんと静まりかえっているので、よく響く、耳の底にまだ水音が残っている。わたし(芭蕉)は、初め「山吹や…」としたのだが、あとで、静かな感じを、もっとよく出すため、「古池や」とあらためた。蛙のとびこんだ水音を生かした、静けさの句になった。

(作者のコメント)　初めての行書で最初は難しいと思いましたが、練習をしているうちにだんだん慣れてきました。名前を行書にして書くのが、意外と難しかったです。最後の年に、推薦賞がとれてよかったです。